

手四地区、下町四地区の幼稚園の保育者達の手により、出来るだけ実体を忠実に記録し、自由遊びの実体をくわしく識ることにより、従来、ともすれば自由遊びが放任の形になりがちなる実情を反省し、新たな眼をもって、これを重視し、加えて、自由遊びのよりよき指導方法なり、誘導のてだてを採らんとした。

◎われわれ保育者の保育中の観察及び記録であるから、そのために受けた制約や、各条件が伴うのは当然であるが、その反面、保育者でなければ、つかめない生々しい実体が繊細に浮かび上ったことは、この研究の大いなる収穫であった。実体をまとめた順に要約して次に述べる。

○1 幼児の遊びの動機

- 1 入園当初はどんな遊びが好まれるか、遊びの種類とその傾向
 - 2 ごっこ遊びにみられる発達段階
 - 3 グループ形成について
 - 4 ごっこ遊びに男女差があるか
 - 5 遊びの具体的内容、例
 - 6 遊びの発展とリーダー
 - 7 遊びの消滅、その動機
- 頁数の関係で直ちに結論に走るが、幼児の自由遊びは、放任教育の形では絶対にいけないということ、しかし、だからといって直ぐに指導、誘導の手をいたすらずらに差伸べることが優秀な保育技術ではないということが云える。この結論が出るまでの、種々の自由遊びの研究過程や、考察の点については、愛育研究所内、遊びの研究員まで連絡下されば、出来るだけ詳しく説明させていただくつもりであるし、今後次のような問題についてもふれていくつもりであ

る。すなわち遊ばない子ども、ホス、リーダー、遊びと遊具との関係、その他この度の研究で浮び上った問題を課題として。

積木遊びにおける

幼児集団の比較

東京・関屋幼稚園

清水エミ子

〈目的〉

どうしたら正しい社会性(交友関係)が身につくようになるか(三十一年度の結果をもとに)積木遊びの集団を比較観察した。

〈対象〉

一年保育男児一二名、内外向性共に六名ずつ。

〈方法〉

入園後五月末まで個々の積木遊びを観察、六月～十月末まで対象児を中心に観察、十一月～十二月、軽いことばの刺戟を与えて比較観察一月～三月、課題(教師の意図する刺戟、グループ全員、グループをませた時、作るものを課題するなど)を与え比較観察した。

〈結果〉 (1)、性格のちがいと特質

消極グループ(積木遊びに対して積極的)社会性なく集団に入りにくく感情の変化はげしいが表さないのでわかりにくい

積極グループ(積木遊びに対して消極的)社会性はあるが粗雑で

せつなものである。感情の変化ははげしく表面にあらわすのでわかりよい。

(四) 交友及び構成の変化

・六～七月、消積木の場での友達がきまりバラバラでも関係つけて遊ぶようになる。グループ以外の子が入ると遊びはこわれてしまう。

(持時十五分×交友一三人) (積作るとこまでいかずざわわっている位、特定の友達なし)

・九～十一月消非常に熱中、目的を持って活動し動くものを好んで作る(積は消に刺戟され遊ぶほうとするがうまく遊べない)。

・十二月(かるいことばの刺戟をあたえる) (消あそべなくなる子、発展し交りもつよくなる子がいる。積木以外のものもつかうようになった。(積)考えずケンカが多く発展しない。粗ぼうになる。

一～三月 人数の制限、作るもの課題、積木の制限をする(消いやがる子、ずるい子、ケンカする子、よろこぶ子などがみられる、(積)ケンカになり遊びは発展しにくい。考えず人をたよるが二月頃頃から(消)のリーダーに教えられしげきをよろこぶようになった。

〈考察〉

・学令前一年の幼児は積木遊びにおいて消極積極共に始めはにげだしたりあらそいになったりするが適度の刺戟ならよろこんで受取り、交友も多くふかく遊びも発展する。

・刺戟をあたえることにより、積木以外の場でもしっかりした交友関係が結ばれるようになった。

・消孤立的で他人を知ろうとしない子、場に入っていけない子は、作るたのしさと共に交るたのしき、よろこびを知ることができた。積造的であらそいが多くなげやりであったが落ついて考えて仕事

をし、ケンカもなくなったのしく交れるようになった。

自然発生の遊びの時や平常ではみせない姿をみせてくれるので指導のよい手がかりになる。これらの効果ある積木遊びを正しくみまもり適度に刺戟することによってより良い社会性をのばす場として用いたいと思う。

幼児の科学技術教育

広島 大学

沖 原 豊

広島・古田幼稚園

伊 達 好

科学技術教育は幼児期からその基礎を正しく築いていかなければならない。

幼児期における科学教育が、一般に低学年の理科観察にのみ止まっていたはならない。観察も十分必要であるが、頭と手を同時に使って、理論と同時に実際を伴わせなければならない。

これには科学技術による一年間のカリキュラムを立て、これに従って順次道具に対する正しい認識と、道具に対しての抵抗を感じなくなるように次第に指導していかねばならない。幼児が道具を使って実際に出来るかどうか、どの範囲まで道具が使えるか、また実際に使ってみて、道具に対して更に視野を広げ道具に対して、意見を深めさせるべきである。これらの指導法は幼稚園においてのみならず